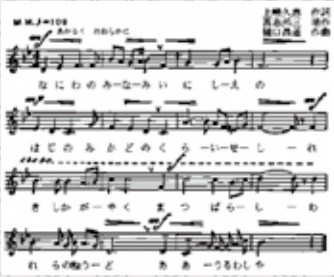
vol.297

松原市歌・松原市章の誕生

西田 孝司（松原市文化財保護審議会）



▲「松原市歌」楽譜

松原市歌の入選は

上嶋久惠さん

（応募作品逆定結果発表）

▲「松原市歌入選」記事『松原市広報』第7号（昭和30年10月5日）

松原市市章決る

晴れの入選は

上嶋一丘さん

▲「松原市市章決る」『松原市広報』第5号（昭和30年）

「松原市歌・市章の誕生」の講演会が、松原ロータリークラブ主催で、4月3日㈰午後1時から松原商工会議所で行われる。

上嶋さん夫婦が込めた郷土愛 喜志邦三補作 樋口昌道作曲

松原市は昭和三十年（一九五五）二月一日、中河内郡松原町・天美町・布忍村・三宅村・恵我村が合併して、発足しました。市では『松原市広報』第三号で「松原市『市章』を募る！」との見出しで、市民・市内勤務者による「将来の発展を象徴する市章図案の懸賞募集」を行いました。

『松原市広報』第五号によると、七月二〇日までに八九〇点もの応募があり、保田俊一郎市長ら五名の審査員によって、阿保町の上嶋一丘さんの作品が選ばれました。会社員の上嶋さんは「自分の地元であり又職域分野でもありますので、全力を注ぎ…毎晩遅くまで想も煉り案を凝らし書き上げたもの十数点応募した中の一つで、…市民の皆様に親しまれ使ってもらって、将来益々栄ゆく松原市の発展を祈って止みません」と喜びの声を述べています。「松原」の地名に基づく松の葉を二つの円形にあしらい、五か町村のがっちりした結合を象徴しています。

市章公募に次いで、『松原市広報』第六号では「松原市市歌公募」の見出しで、市民や市内勤務者に「一般市民が気軽に愛唱出来、郷土を讃美し、郷土愛の意欲の向上を計らんとする」趣旨で、市歌が募集されました。市章と同じく、市長・議長・教育長らが審査し、九月二十七日に七十八編の作品から、阿保町の上嶋久恵さんの作品が入選しました。

『松原市広報』第七号（昭和三十年十月五日）に掲載されましたが、久恵さんは市章入選作の一丘さんの奥様でした。久恵さんは「松原市独特の気分を出して、作って見ようと存じまして、家事のひまひまに、いゝ句が思ひうかべては記しておいて、ぎりぎりにまとめ上げたのが思はぬ幸運にも入選致しまして、拙い作が皆様の歌として晴の檜舞台に出ると思へば、こんなうれしい事は御ざいません」と喜びに頬を輝せながら語っておられます。

市歌は、喜志邦三が補作し、樋口昌道が「あかるく おおらかに」作曲して完成しました。今、市内のゴミ収集に向かうパッカー車が流しているメロディーで、聞き覚えがあると思います。

一．浪花の南　いにしえの
反正のみかどの　位せし
歴史かがやく　松原市
われらの郷土　ああ美わしや

二．産業日々に　すすみゆき
仰ぐ金剛　信貴　生駒
黎明つぐる　松原市
われらの郷土　ああ光あれ

三．平和の松の　旗じるし
高き文化の　色そめて
朝日に映ゆる　松原市
われらの郷土　ああ栄あれ

一番は、（五世紀前半）十八代反正天皇が、柴籬神社（上田七丁目）付近に丹比柴籬宮とよぶ都を五年間、置いた伝承を歌います。反正天皇は「はんぜい」と呼びますが、同詞は「はじ」と読ませています。地元の上田村の分村として所在した天皇の名を冠した反正山村（上田五丁目）は、江戸時代、土師山村とも表記され、「はじやまむら」とよばれたからです。

三番では、一丘さん考案の市章「松の旗じるし」を歌います。夫婦共作の願いとして、栄ある松原市を讃美したのです。

同詞を補ったのが堺生まれの著名な詩人の喜志邦三です。喜志は「春の唄」や、「踊子」、「お百度こいさん」など多くの人々に愛唱される歌謡曲を作詞しました。昭和四十四年（一九六九）には、開学四年目に制定された阪南大学学歌も作詞しています。再三河内天美の阪南大学を訪れ、イメージ作りに努めたといいます。

作曲家の樋口昌道は、近畿大学学歌を戦後まもなく作曲したことで知られています。また、「大阪市民の歌」の作曲も手掛けましたが、昭和三十八年（一九六三）に開校した松原第二中学校（三宅西）の校歌の作曲者でもありました。若人をホープとたたえた奈良出身の詩人・安西冬衛の作詞を得て、二中生の愛校心を鼓舞したのです。

市歌はその後、「元希者エクササイズ」として、市・市老人クラブ連合会・阪南大学の協働のもと、同歌をアレンジして松原市独自の体操としても活用されています。脈々と市民の間に、市歌は市章と共に生き続けているのです。